

岸壁の母

八女郡広川町 丸山 恵助

君は中国に行くなら、岸壁の母のたつてのお願いを中国の要職の人に頼んでくれないかと、東京のかつての同期生より依頼あり快よく引受けた。

本日は16年前1977年に中国に渡った10月3日である。中国訪問前に岸壁の母端野イセ様より「貴方は中国に行かれるなら、息子新二が何しているやら早く帰ってくるように中国の偉い人に嘆願書と新二が入隊前や小さい時一緒に撮った写真を持参下さい」との文通。新二は中学時代、相撲の大將していたとか、実に見事な立派なまわし姿の写真等、所持して上海、南京、揚州、天津、北京市に行き、先々の大臣級の偉い人々に今、日本では岸壁の母と言って年老いて一人息子の帰りを今か今かと毎日待っておられる人がおられます。先生方のご尽力により息子さんを早く探して年老いたお母さんに会わせて下さいと頼んで回った。行く先々の市の要職の方々は嘆願書と写真を受取り、承知しましたと、心より引受けていただき、航空便にて最終訪問の地、北京より今まで訪問先の状況をくわしく便りにして深夜ホテルの一室にて郵送の準備をして、翌朝ホテルの係員に託した。岸壁のお母さん安堵して喜んでくれるだろうか。

一人息子の新二君は立教大より入隊したらしく、石頭予備士官学校6中隊歩兵砲の出身である。自分は4中隊一般歩兵小銃中隊であり同期生である。石頭とは旧満州国牡丹江省寧安県石頭の地であり鏡泊湖、東京城の近郊である。

昭和20年8月9日ソ連軍の侵攻により関東軍総司令官の命により総員二分し、学校教育主任荒木護夫少佐（荒木貞夫大將の長男）と学校長小松大佐に別れ、端野新二君は荒木少佐を部隊長に、牡丹江の先磨刀石方面に出陣。ソ連軍戦車に向って戦闘肉迫攻撃13日に約700人近く玉砕したと聞く。当時参戦生き伸びた者の話によれば、良くも奇蹟的に今日有ると、ソ連戦車も一時前進中止したとか。新二君と磨刀石の戦闘に参戦行動を共にした熊本市出身の同僚の話によれば「弾に当って川に倒れ込んだか、あるいは危険を感じて川に飛び込んだのか？その時が最後だった」と、「おそらく弾に当って倒れ込んだのが最後の別れになっただろう」と。「しかし岸壁の母いせ様には最後まで新二君は戦死したとは言えなかった」と。

いせ様は新二君の帰りを今日か明日かと待っていたのである。

10月17日、2週間の旅より帰国し、数日後、東京出張のため前夜より町田市の同期生宅に宿泊、翌早朝端野宅に向く。東京駅の5つ位手前の大森駅に下車、自分は歩くのは早く13分位で端野宅に到着、玄関先で大声にて福岡の丸山参りましたと呼びかける。前日連絡していたので喜んで迎えてくれる。近郊一帯は戦災を免れていたらしく、木造の家並が連なっている。田舎そのままの隣組風である。

いせ様は膝が弱っているようである。昔風の上り台を降るのに苦労している。迎えるのに努

力して土間に、その時の笑声は新二君が帰って来たように、本当に新二君であったらと内心可哀相でならない。

部屋に案内され、床の間の上には新二君の叙勲と岸壁の母の作詞家藤田まさとの三番までの直筆がかかっている。台所の方でコトコトと何かを切る音がする。「お母さん何しよっとね」と尋ねる。「貴方にうまい味噌汁でもと葱をきざんでいる」と。「今朝町田の同期生の家で朝食はすまして来たので、お母さんに中国の土産話を今からしたい、私も10時から会議に行かねばならないから」と。「折角来てもらったから午後から出席して」と要請され、中国の行先々での新二君探しの件、小さい頃からの新二君の話、「何で岸壁の母と言われるね」「それはね、舞鶴にナホツカより船が入港するたびに、無い銭をはたいてそれも深夜まで針仕事してたくわえた銭で汽車で舞鶴に行っては引揚者に新二は知りませんかと皆さんに尋ねていた。そのたびに毎日新聞の女の記者の方といつも一緒になり、そのうちに岸壁の母になってしまった」と。「そうだったの、お母さんも随分苦勞したろうね、今度中国の偉い人達に新二君のこと頼んで来たので、お母さんが健康でいれば必ず新二君は帰って来るよ」。それだけがお母さんに対する慰めの言葉であった。「丸山さん、今後東京に出張の際は高い料金を払ってホテルや旅館に泊らないで、家には米もあるし二階には新二が帰った時のため部屋も準備してあるので二階に寝てもらって良いから」と心尽しの言葉である。「お母さん床の間の上の岸壁の母の詞写真撮って良いね、良かったらお母さんと一緒に写真撮ろうか」「ちょっと待ってね」衣類は普段着に鏡台の前にて頭に櫛を当て、「はいどうぞ」と当時の写真と新二君の幼少の母との写真、相撲姿の美男子自宅の一室に保存している。全国生存者により3年に1回慰霊祭を実施している。靖国神社で2回昇殿参拝、端野いせ様も両方より腕をささえ、自衛隊の音楽隊の静かな音楽にて参拝、皆涙している様である。

いせお母さんの心中如何にあるだろうか？皆参拝に全国から集まっているのに、この中に新二はいないだろうかそう思っているかも知れない。大きくなって役に立てばと末娘の高校1年生を同伴参拝した。一人が指揮し約400人がその合図に行動する姿と涙するのに感銘したらしい、全員統率のすばらしさを。

岸壁の母端野いせ様も存命なれば94才、今は石川県富来町風無万福寺に納骨されてあるとか、待ち望んだ一人息子新二君と幸せに暮してあるだろう。ご両名のご冥福祈り 合掌



母 端野 いせ

息子 端野 新二（11歳当時）